

維持管理シナリオを考慮した コンクリート補修の考え方

一般社団法人コンクリートメンテナンス協会
極東興和株式会社

江良 和徳

<https://www.j-cma.jp/>

1.はじめに

- これで十分でしょうか？

2.コンクリートの劣化

- 塩害の劣化メカニズム
- 中性化の劣化メカニズム
- ASRの劣化メカニズム

3.コンクリート補修の基本的な考え方

- 塩害・中性化の補修工法選定
予防保全の事例にて
事後保全の事例にて
- ASRの補修工法選定
事後保全の事例にて

1.はじめに

急増する「老朽化」と「劣化」



- 高度経済成長期に大量に建設された社会資本ストックが老朽化
- 建設当時には明らかにされていなかった塩害、中性化、ASRなどの劣化の顕在化

これで十分でしょうか？

ケース1

【塩害の予防保全】



- 沿岸部に位置する橋梁で、飛来塩分の影響を受ける。
- まだひび割れ等の変状は見られないが、将来的に鉄筋腐食の懸念がある。



- 予防保全的対策として表面全体に表面含浸工を施す。
- 含浸材の種類は塩化物イオン侵入阻止性を考慮して選定する。

これで十分でしょうか？

[ケース1：塩害の予防保全]

- 沿岸部に位置する橋梁で、飛来塩分の影響を受ける。
- まだひび割れ等の変状は見られないが、将来的に鉄筋腐食の懸念がある。
- 予防保全的対策として表面全体に表面含浸工を施す。
- 含浸材の種類は塩化物イオン侵入阻止性を考慮して選定する。

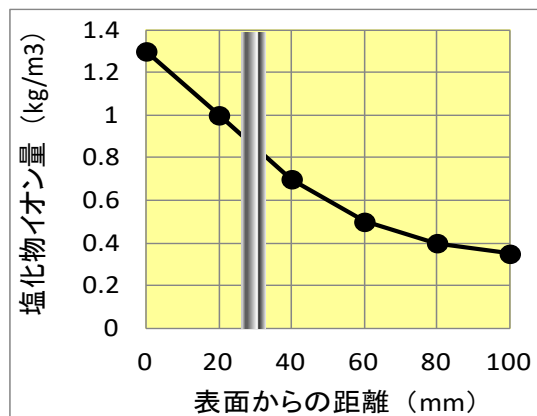


悪くはありませんが、

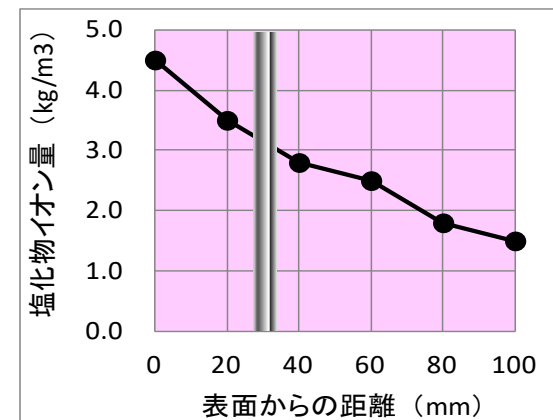
- 塩害の予防保全は基本的に『潜伏期』または『進展期』で実施される。
- 『潜伏期』と『進展期』では補修の要求性能が異なることを考慮すべき。



潜伏期、進展期の外観



潜伏期の例



進展期の例

これで十分でしょうか？

ケース2

【塩害の事後保全】



- 沿岸部に位置する橋梁で、塩化物イオン量は腐食発生限界を**超えている**。
- 部分的にコンクリートの**浮き、剥離等**の変状が見られる。



- 浮き、剥離部に**部分断面修復工**、コンクリート全体に**表面含浸工**を選定。
- 断面修復工には**マクロセル腐食抑制**も考慮して工法を選定。

これで十分でしょうか？

[ケース2：塩害の事後保全]

- ・沿岸部に位置する橋梁で、塩化物イオン量は腐食発生限界を超えている。
- ・部分的にコンクリートの浮き、剥離等の変状が見られる。
- ・浮き、剥離部に部分断面修復工、コンクリート全体に表面含浸工を選定。
- ・断面修復工にはマクロセル腐食抑制も考慮して工法を選定。



悪くはありませんが、

- ・断面修復した範囲は防錆処理も施され、鉄筋腐食の進行は抑制される。
- ・境界部のマクロセル腐食のリスクも低減されている。
- ・しかし、断面修復した範囲以外は表面含浸工を施ただけで、内部の鉄筋周囲には高い塩化物イオンが存在する腐食環境のまま。



加速期前期/後期の外観



剥離部を部分断面修復



表面全体に表面含浸工

これで十分でしょうか？

ケース3

【ASRの事後保全】



- 建設から30年以上経過した橋梁下部工で、亀甲状のひび割れが多数発生。
- SEM観察、偏光顕微鏡観察の結果、ASRによる劣化であると判定。



- ひび割れ箇所にひび割れ注入工、コンクリート全体に表面含浸工を選定。
- ひび割れ注入材にはひび割れ追従性をもたせた材料を選定。

これで十分でしょうか？

[ケース3：ASRの事後保全]

- ・建設から30年以上経過した橋梁下部工で、亀甲状のひび割れが多数発生。
- ・SEM観察、偏光顕微鏡観察の結果、ASRによる劣化であると判定。
- ・ひび割れ箇所にひび割れ注入工、コンクリート全体に表面含浸工を選定。
- ・ひび割れ注入材にはひび割れ追従性をもたせた材料を選定。



悪くはありませんが、

- ・劣化因子の侵入に対しては、ある程度抑制できる。(⇒100%遮断は困難)
- ・ひび割れの進展に対しては、ある程度追従できる。(⇒限界がある)
- ・この構造物の将来的なASR膨張性の予測が重要。(⇒再劣化の懸念)



加速期の外観



ひび割れ注入工



表面全体に表面含浸工

2.コンクリートの劣化

- 塩害
- 中性化
- ASR

●塩害・中性化



塩害の劣化メカニズム

【原因】

- ・種々の原因で塩化物イオンがコンクリート中に浸入
- ・侵入した塩化物イオンはコンクリート表面から内部へ浸透



【劣化の進行】

- ・塩化物イオンが鉄筋位置に到達
- ・鉄筋位置の塩化物イオン量が一定量(腐食発生限界)を超えると、鉄筋の不動態皮膜が破壊される
- ・そこに水、酸素が供給されることにより鉄筋が腐食



【性能低下】

- ・ひび割れ、コンクリートの浮き・はく離、鉄筋露出など
- ・コンクリートと鉄筋との付着が低下
- ・鉄筋断面の減少

腐食発生限界塩化物イオン濃度

- 2018年制定コンクリート標準示方書[維持管理編]より、**みなし規定なし**
- 使用材料や配合、含水状態などに影響され、個々の構造物により異なる
- 点検結果に基づいて設定する
- **算定式**による設定

(a) 普通ポルトランドセメントを用いた場合

$$C_{lim} = -3.0(W/C) + 3.4$$

ただし、W/Cは0.3～0.55の範囲

$$W/C=0.55\text{のとき、}C_{lim} = 1.75\text{kg/m}^3$$

$$W/C=0.30\text{のとき、}C_{lim} = 2.50\text{kg/m}^3$$

(b) 高炉セメントB種、フライアッシュセメントB種相当を用いた場合

$$C_{lim} = -2.6(W/C) + 3.1$$

ただし、W/Cは0.3～0.55の範囲

$$W/C=0.55\text{のとき、}C_{lim} = 1.67\text{kg/m}^3$$

$$W/C=0.30\text{のとき、}C_{lim} = 2.32\text{kg/m}^3$$

(c) 低熱ポルト...

概ね1.2～2.5kg/m³程度

塩害の劣化事例



必ず鉄筋腐食の進行に伴ってコンクリート構造物(部材)の性能低下が生じる

中性化の劣化メカニズム

【原因】

- ・大気中の二酸化炭素がコンクリート中に浸入
- ・二酸化炭素がセメント水和物と炭酸化反応
- ・細孔溶液中のpHが低下 (pH=11以下)



【劣化進行】

- ・中性化領域がコンクリート表面から内部に向かって進行
- ・中性化領域が鉄筋付近まで到達すると不動態皮膜が破壊
- ・そこに水、酸素が供給されることにより鉄筋が腐食

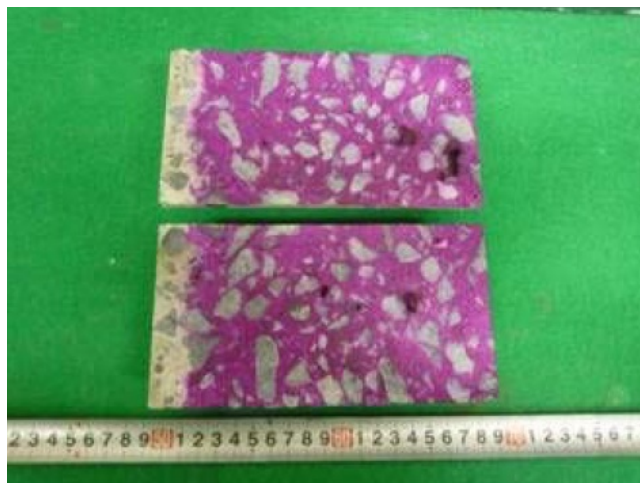


【性能低下】

- ・ひび割れ、コンクリートの浮き・はく離、鉄筋露出など
- ・コンクリートと鉄筋との付着が低下
- ・鉄筋断面の減少

中性化深さと水の浸透の影響

【中性化深さ】



- ・フェノールフタレイン溶液を吹き付けたときの非発色部分
- ・コア試料、はつり箇所、ドリル削孔による粉末等により試験を実施
- ・一般的に鋼材腐食発生限界は中性化残り10mm

【水の浸透の影響】

- ・中性化によりpHが低下しても、水の影響がなければ腐食しにくい
- ・同一部材、同一コンクリート品質であっても中性化深さに差が生じる
- ・塩害環境では中性化残り10mm以上であっても腐食開始

中性化の劣化事例



壁高欄のコンクリートはく落

- 道路橋壁高欄
- 自動車の排気ガスによる CO_2 供給
- はく離箇所以外の鉄筋も腐食

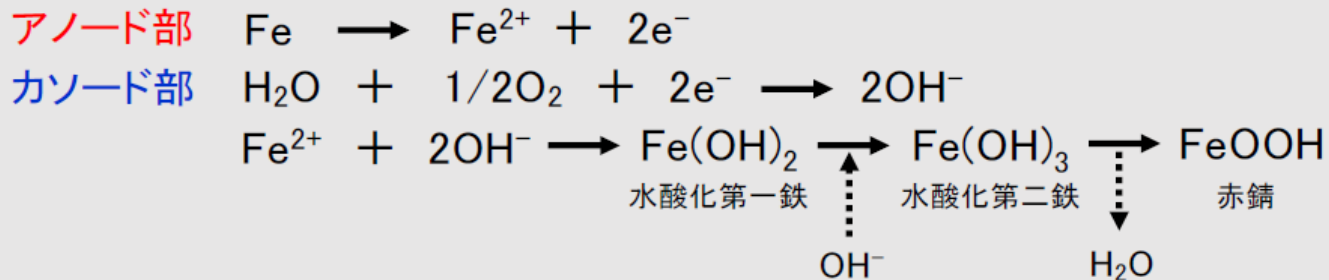
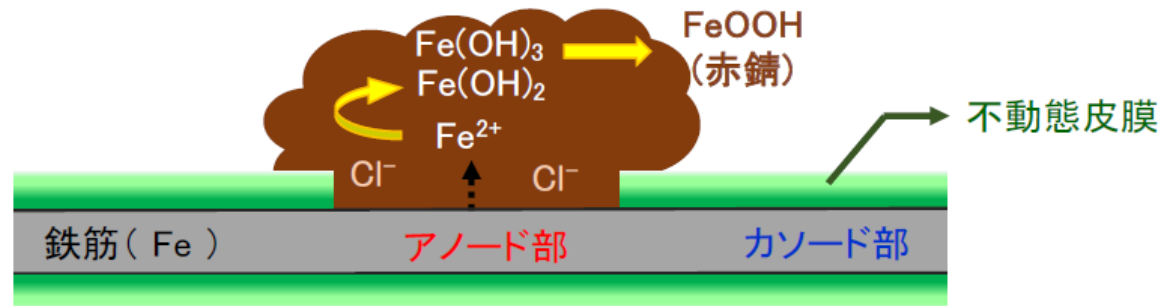


張出し床版下面の鉄筋露出

- RC上部工の張出し床版下面
- もともと鉄筋かぶりが不足
- 早期に中性化領域が鉄筋位置に到達

必ず鉄筋腐食の進行に伴ってコンクリート構造物(部材)の性能低下が生じる

不動態皮膜と鉄筋腐食



不動態皮膜 : 高アルカリ環境下の鋼材表面に酸素が吸着した緻密な酸化物層

不動態皮膜の破壊 : 腐食発生限界を超える塩化物イオンの存在(塩害)
鋼材周囲のpH低下(中性化)

アノード反応 : 電子2個を鉄筋中に残し、鉄がイオンとなって溶出する反応

カソード反応 : アノード反応によって生じる電子を消費する反応

塩害の劣化過程

外観上のグレード	劣化過程	劣化の状態
グレードⅠ	潜伏期	外観上の変状が見られない, 鋼材腐食発生塩化物イオン濃度以下
グレードⅡ	進展期	外観上の変状が見られない, 鋼材腐食発生塩化物イオン濃度以上, 腐食が開始
グレードⅢ-1	加速期前期	腐食ひび割れや浮きが発生, さび汁が見られる
グレードⅢ-2	加速期後期	腐食ひび割れの幅や長さが大きく多数発生, 腐食ひび割れの進展に伴うかぶりコンクリートの部分的な剥離・剥落が見られる, 鋼材の著しい断面減少は見られない
グレードⅣ	劣化期	腐食ひび割れの進展に伴う大規模な剥離・剥落が見られる, 鋼材の著しい断面減少がみられる, 変位・たわみが大きい

出典: 2018年制定 コンクリート標準示方書[維持管理編] (土木学会)

[塩害の劣化指標]

潜伏期、進展期

加速期以降



塩化物イオン濃度



鋼材腐食量、腐食ひび割れ等の変状

中性化の劣化過程

外観上のグレード	劣化過程	劣化の状態
グレードⅠ	潜伏期	外観上の変状が見られない, 腐食 開始前
グレードⅡ	進展期	外観上の変状が見られない, 腐食が 開始
グレードⅢ-1	加速期前期	腐食ひび割れ が発生
グレードⅢ-2	加速期後期	腐食ひび割れの進展とともに剥離・剥落が見られる, 鋼材の断面欠損 は生じていない
グレードⅣ	劣化期	腐食ひび割れとともに 剥離・剥落 が見られる, 鋼材の断面欠損が生じている

出典:2018年制定 コンクリート標準示方書[維持管理編](土木学会)

[中性化の劣化指標]

潜伏期、進展期

加速期以降

⇒ 中性化深さ

⇒ 鋼材腐食量、腐食ひび割れ等の変状

●アルカリシリカ反応(ASR)



ASRの劣化メカニズム

【原因】

- ・コンクリート中は高アルカリ環境
- ・コンクリート構造物は雨水や地下水などによる水分供給
- ・コンクリートの骨材としての反応性骨材の使用



【劣化の進行】

- ・反応性骨材がアルカリ分と反応してアルカリシリカゲルを生成
- ・コンクリート内部へ水分が侵入
- ・アルカリシリカゲルの吸水膨張によりコンクリートにひび割れ発生



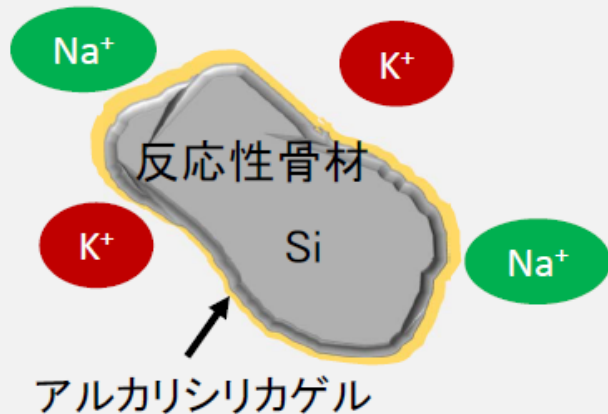
【性能低下】

- ・ひび割れ進展、白色ゲル析出、段差、異常変形など
- ・圧縮強度、静弾性係数の低下、鉄筋腐食、鉄筋破断など

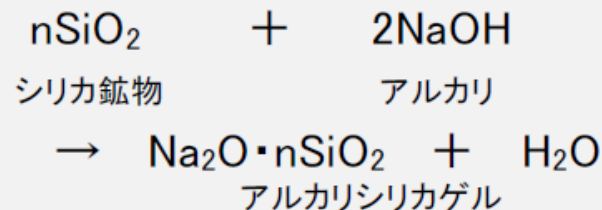
アルカリシリカゲルの生成と膨張

第1ステージ

『アルカリシリカゲルの生成』



《化学式》

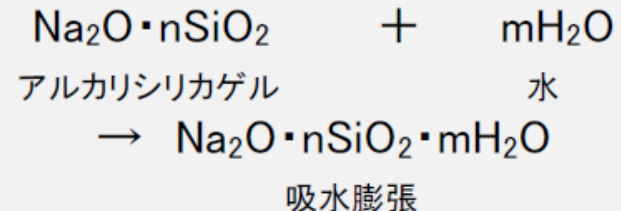


第2ステージ

『アルカリシリカゲルの膨張』



《化学式》



ASRの劣化事例



ASRによるひび割れはゲルの吸水膨張に起因し、鉄筋腐食とは無関係に進行する
ただし、ASRひび割れが起点となって鉄筋腐食が進行することもある

ASRの劣化過程

外観上のグレード	劣化過程	劣化の状態
グレードⅠ	潜伏期	ASRによる膨張およびそれに伴うひび割れがまだ発生せず, 外観上の変状が見られない
グレードⅡ	進展期	水分とアルカリの供給下において膨張が継続的に進行し, 軽微なひび割れが発生する。変色, アルカリシリカゲルの滲出が見られる場合もある。しかし, 鋼材腐食によるさび汁は見られない。
グレードⅢ	加速期	ASRによるひび割れが進展し, ひび割れの幅および密度, 範囲が増大する。また, 鋼材腐食によるさび汁が見られる場合もある。
グレードⅣ	劣化期	ひび割れの幅および密度がさらに増大し, 段差, ずれや, かぶりの部分的な剥離・剥落が発生する。鋼材腐食が進行し, さび汁が見られる。外力の影響によるひび割れや鋼材の損傷が見られる場合もある。変位・変形が大きくなる。

出典: 2018年制定 コンクリート標準示方書 [維持管理編] (土木学会)

[ASRの劣化指標]

- ・ひび割れ状況

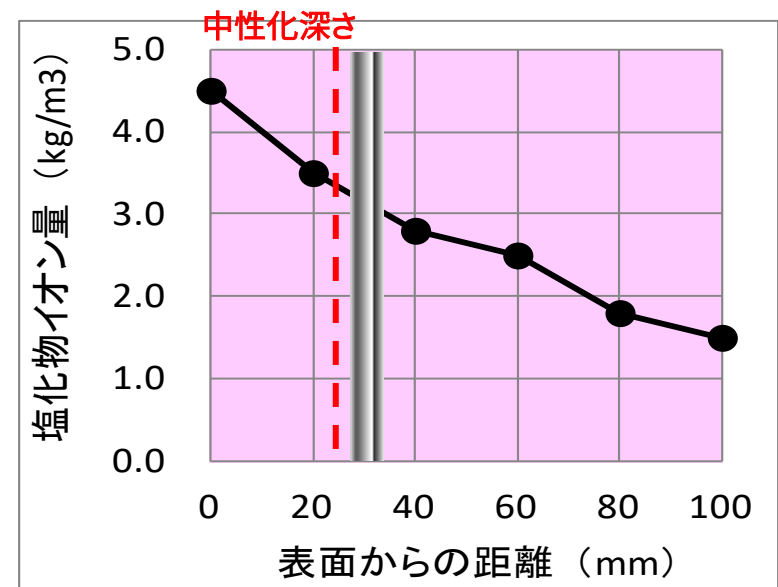
[劣化過程の留意点]

- ・あくまで調査時点での外観上のグレード
- ・将来の膨張性の有無は考慮されていない

3.コンクリート補修の基本的な考え方

- 塩害・中性化の補修工法選定
- ASRの補修工法選定

●塩害・中性化の補修工法選定



塩害・中性化の一般的な補修工法

【劣化因子の遮断】

目的：鉄筋周囲を腐食環境にさせない

工法：表面含浸工法
表面被覆工法
(ひび割れ注入工法)

【劣化因子の除去】

目的：腐食環境となった鉄筋周囲の環境を改善

工法：脱塩工法
再アルカリ化工法

【鉄筋腐食の抑制】

目的：既に腐食が開始している鉄筋の腐食反応そのものを抑制

工法：電気防食工法
鉄筋防錆材(亜硝酸リチウム)の活用

【コンクリート脆弱部の修復】

目的：コンクリート浮き、はく離、鉄筋露出部の修復

工法：断面修復工法



[条件]

- 道路橋RCけた
- 海岸線から300mに位置し、**飛来塩分**の影響を受ける
- 定期点検および外観目視調査の結果、ひび割れ等の**変状なし**

[着目点]

- 環境条件より塩害および中性化による劣化進行を想定
- 塩化物イオン含有量試験および中性化深さ試験を実施
- 「**潜伏期**」または「**進展期**」を判別
- 工学的判断と維持管理シナリオに応じて工法選定

塩害・中性化の補修工法選定の例

～ 事例1: 予防保全 ～

外観上のグレード	劣化過程	劣化の状態
グレードⅠ	潜伏期	外観上の変状が見られない, 鋼材腐食発生塩化物イオン濃度以下
グレードⅡ	進展期	外観上の変状が見られない, 鋼材腐食発生塩化物イオン濃度以上, 腐食が開始
グレードⅢ-1	加速期前期	腐食ひび割れや浮きが発生, さび汁が見られる
グレードⅢ-2	加速期後期	腐食ひび割れの進展に伴う剥離・剥落が見られる, 鋼材の著しい断面減少は見られない
グレードⅣ	劣化期	腐食ひび割れの進展に伴う大規模な剥離・剥落が見られる, 鋼材の著しい断面減少がみられる, 変位・たわみが大きい

『潜伏期』と『進展期』の違いは？

出典: 2018年制定 コンクリート標準示方書[維持管理編] (土木学会)

[塩害の劣化指標]

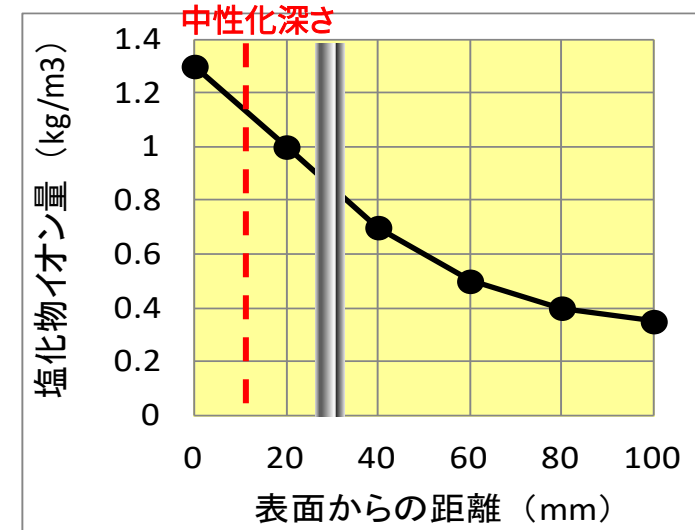
潜伏期、進展期

⇒ 塩化物イオン濃度

加速期以降

⇒ 鋼材腐食量、腐食ひび割れ等の変状

劣化過程が
【潜伏期】
の場合



[劣化指標]

- 外観上の変化は見られない
 - 腐食発生限界塩化物イオン濃度以下 (塩害)
 - 中性化残りが発錆限界以上 (中性化)
- ⇒ まだ鉄筋が腐食する理由はない状態

[補修工法の主たる要求性能]

- 塩化物イオンを侵入させない (塩害の場合)
 - 二酸化炭素を侵入させない (中性化の場合)
- ⇒ 劣化因子を遮断し、鉄筋が腐食する環境を作らない

劣化過程が【**潜伏期**】の場合

[維持管理シナリオに応じた補修工法の選定]

(1) 経過観察シナリオ

- ・健全な状態で当面は性能低下の懸念はない
- ・**劣化予測**にて腐食発生限界を超えるまでの期間に余裕がある場合
⇒ 点検強化、モニタリングによる継続的な状況把握が必須

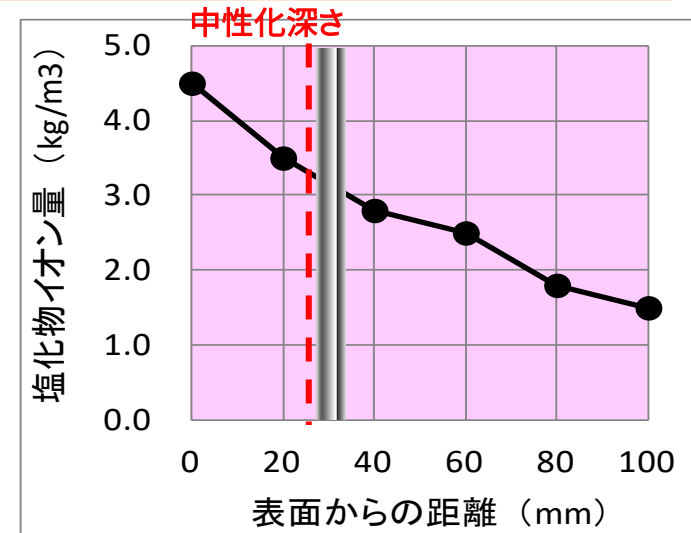
(2) 要求性能を満たす表面含浸工を定期的に行うシナリオ

- ・劣化因子を遮断して**鉄筋腐食環境を作らない**ための予防保全
- ・適用する材料には耐用年数があるため、定期的に再補修を行う
⇒ 軽微な処置を繰り返すことで劣化を顕在化させない

参考：一般的な表面含浸材の種類

種別		特長	備考
シラン系		- 疎水性のアルキル基によりコンクリート表層部に吸水防止層（撥水層）を形成。 - 細孔を埋めないため呼吸性を損なわない。	- 水分、塩化物イオンの遮断性は優れるものの、中性化を促進することもある。 - ただし、材料選定次第では中性化へも適用可能。 - 滞水する部位では適用困難。
けい酸塩系	反応型 けい酸塩系	- けい酸ナトリウム系 - けい酸カリウム系 - 水酸化カルシウムと反応し、C-S-Hゲルを生成して空隙を充填する。 - 水分供給により再度溶解。	- 微細ひび割れであれば閉塞。 - 中性化が進行した領域ではカルシウム分が減少しており、緻密化の反応が困難。 - ただし、カルシウム補助剤を併用するタイプもある。
	固化型 けい酸塩系	- けい酸リチウム系 - 材料自体の乾燥固化により空隙を充填する。 - 固化物は難溶性。	- 微細ひび割れを閉塞。 - 表面硬度の向上。 - 劣化因子遮断性はやや低い。

劣化過程が
【進展期】
の場合



[劣化指標]

- ・外観上の変化は見られない
- ・腐食発生限界塩化物イオン濃度以上(塩害)
- ・中性化残りが発錆限界未満(中性化)
⇒ 変状は生じていないが、鉄筋腐食は開始している

[補修工法の主たる要求性能]

- ・塩化物イオン、二酸化炭素、水、酸素をこれ以上侵入させない
- ・鉄筋腐食をこれ以上進行させない
⇒ 鉄筋腐食は始まっているが、できるだけひび割れを発生させたくない

劣化過程が【進展期】の場合

[維持管理シナリオに応じた補修工法の選定]

(1) 経過観察シナリオ

- ・現時点で変状が生じているわけではないため、しばらく様子を見る
- ・ただし鉄筋は腐食環境にあるため、**将来的には変状が生じる**ことを想定
⇒ それほど長くは放置できない

(2) 要求性能を満たす表面含浸工を定期的に行うシナリオ

- ・劣化因子を遮断して鉄筋腐食進行を遅らせることで、**変状を生じさせない**
- ・適用する材料には耐用年数があるため、定期的に再補修を行う
⇒ 既に不動態皮膜は破壊されており、鉄筋腐食が開始しているため、**鉄筋腐食抑制効果**を併せ持つ材料、工法を選択するのも効果的

参考：鉄筋腐食抑制効果を併せ持つ表面含浸材の例

種別	特長	備考
鉄筋腐食抑制タイプ 含浸系表面保護材	・コンクリート表面に塗布するだけで深く浸透し、塩化物イオンの侵入を阻止する吸水防止層を形成。 ・さらに、鉄筋のまわりに不動態皮膜にかわる保護層を形成し腐食を抑制。	劣化因子遮断 ＋ 鉄筋腐食抑制
亜硝酸リチウム併用型 表面含浸材	・1層目の亜硝酸リチウム系含浸材により鉄筋不動態皮膜を再生して鉄筋腐食を抑制。 ・2層目のシラン・シロキサン系含浸材が撥水効果を発揮し、劣化因子を遮断。 ・塩化物イオン濃度に応じて亜硝酸リチウム塗布量を設定。	劣化因子遮断 ＋ 鉄筋腐食抑制



[条件]

- ・海上部に位置するRC構造物
- ・鉄筋位置での塩化物イオン量は腐食発生限界を**超えている**
- ・ひび割れ、錆汁、コンクリートの浮き・はく離、鉄筋露出等の**変状が見られる**

[着目点]

- ・変状の規模、鉄筋腐食の程度、鉄筋断面減少の有無等を調査
- ・**「加速期前期」**または**「加速期後期」**を判別
- ・工学的判断と維持管理シナリオに応じて工法選定

外観上のグレード	劣化過程	劣化の状態
グレードⅠ	潜伏期	外観上の変状が見られない,鋼材腐食発生塩化物イオン濃度以下
グレードⅡ	進展期	外観上の変状が見られない,鋼材腐食発生塩化物イオン濃度以上,腐食が開始
グレードⅢ-1	加速期前期	腐食ひび割れや浮きが発生,さび汁が見られる
グレードⅢ-2	加速期後期	腐食ひび割れの幅や長さが大きく多数発生,腐食ひび割れの進展に伴うかぶりコンクリートの部分的な剥離・剥落が見られる,鋼材の著しい断面減少は見られない
グレードⅣ	劣化期	腐食ひび割れの進展に伴う大規模な剥離・剥落が見られる,鋼材の著しい断面減少が見られる

『加速期前期』と『加速期後期』
の違いは？

書[維持管理編](土木学会)

[塩害の劣化指標]

潜伏期、進展期

⇒ 塩化物イオン濃度

加速期以降

⇒ 鋼材腐食量、腐食ひび割れ等の変状

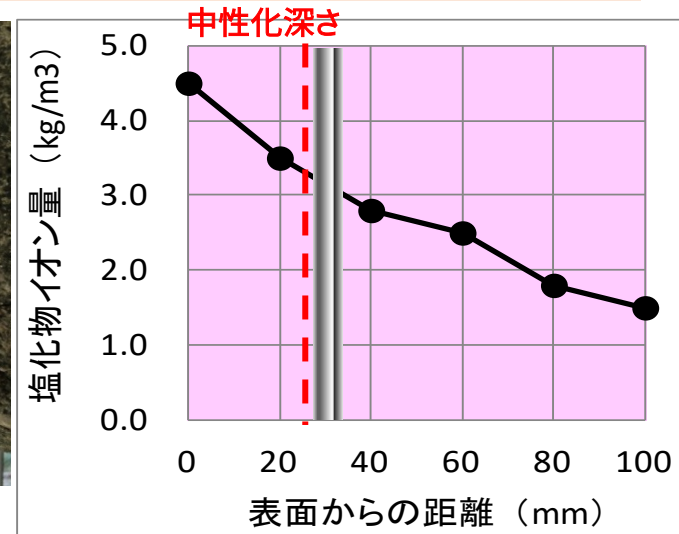
塩害・中性化の補修工法選定の例

～ 事例2:事後保全 ～

劣化過程が

【加速期前期】

の場合



[劣化指標]

- ・腐食ひび割れやコンクリートの浮き・はく離の程度
- ・鉄筋腐食量、腐食速度

⇒ ひび割れを通じた劣化因子の直接侵入により鉄筋腐食が加速

[補修工法の主たる要求性能]

- ・塩化物イオン、二酸化炭素、水、酸素をこれ以上侵入させない
- ・鉄筋腐食をこれ以上進行させない

⇒ 変状は軽微な段階なので、ひび割れも浮き剥離も増やしたくない

劣化過程が【**加速期前期**】の場合

[維持管理シナリオに応じた補修工法の選定]

(1) 変状に応じた必要最小限の補修を定期的に行うシナリオ

- ・ひび割れ注入工、部分断面修復工、表面保護工による必要最小限の補修
- ・ただし、これらの対策では**再劣化**する可能性がある
- ・外観変状がまだ比較的軽微な段階では本シナリオが**LCCでも有利**となることが多い
⇒ 補修のイニシャルコストを最小とし、必要に応じて再補修を繰り返すという選択
各工法に**鉄筋腐食抑制効果**を併せ持つ材料を選択するのも効果的

(2) 鉄筋腐食を根本的に抑制し、将来的な再劣化を許容しないシナリオ

- ・電気防食工法（鉄筋腐食を根本的に抑制）
- ・亜硝酸リチウム内部圧入工法（鉄筋腐食を根本的に抑制）
- ・全断面修復（塩化物イオンを含むコンクリートを完全に除去）
⇒ これらの工法を適用すれば、再劣化のリスクを限りなく**低減**できる
構造物の重要性や費用対効果を十分に検討したうえで適用

「変状に応じた必要最小限の補修を定期的に行うシナリオ」で適用される補修工法



表面保護工(表面含浸工)



表面保護工(表面被覆工)



ひび割れ注入工



部分断面修復工

劣化過程が

【加速期後期】

の場合

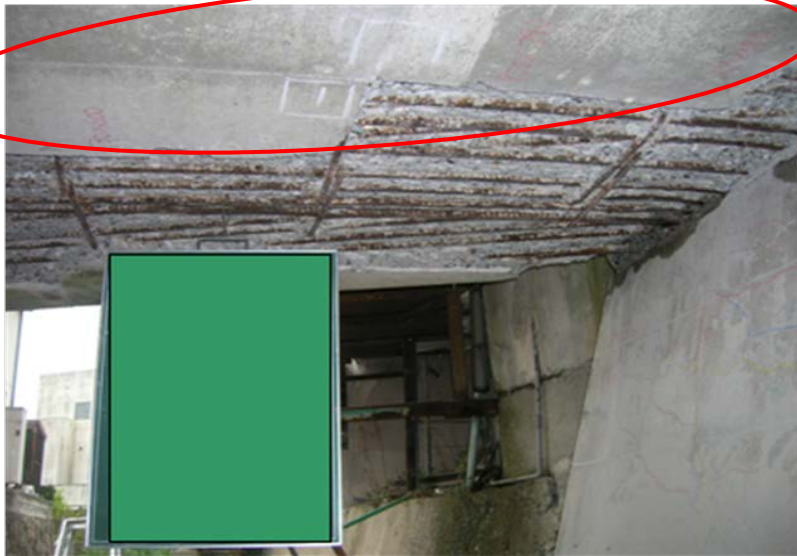


[劣化指標]

- ・腐食ひび割れやコンクリートの浮き・はく離の程度
- ・鉄筋腐食量、腐食速度
 - ⇒ ひび割れや浮き剥離を通じ、腐食鉄筋への劣化因子の供給が増大
 - ⇒ 劣化速度がさらに加速し、変状の範囲拡大

[補修工法の主たる要求性能]

- ・鉄筋腐食の進行をこれ以上進行させない
 - ⇒ これ以上の変状(ひび割れ、剥離、剥落)の範囲増大は許容できない
 - ⇒ これ以上の鉄筋断面減少(減肉)は許容できない
 - ⇒ 劣化期への転落は何としても回避したい



- 浮き、剥離箇所は必然的に断面修復を行うはず
⇒ 断面修復した範囲の鉄筋は以後の腐食リスクは低い
- 問題は、断面修復した範囲以外をどうするか？
⇒ 同じ塩害環境であれば、高い塩化物イオンが残っている
当然、鉄筋は腐食環境にある



将来的に新たなひび割れ、浮き剥離が発生する可能性を考慮すべき

劣化過程が【**加速期後期**】の場合

[維持管理シナリオに応じた補修工法の選定]

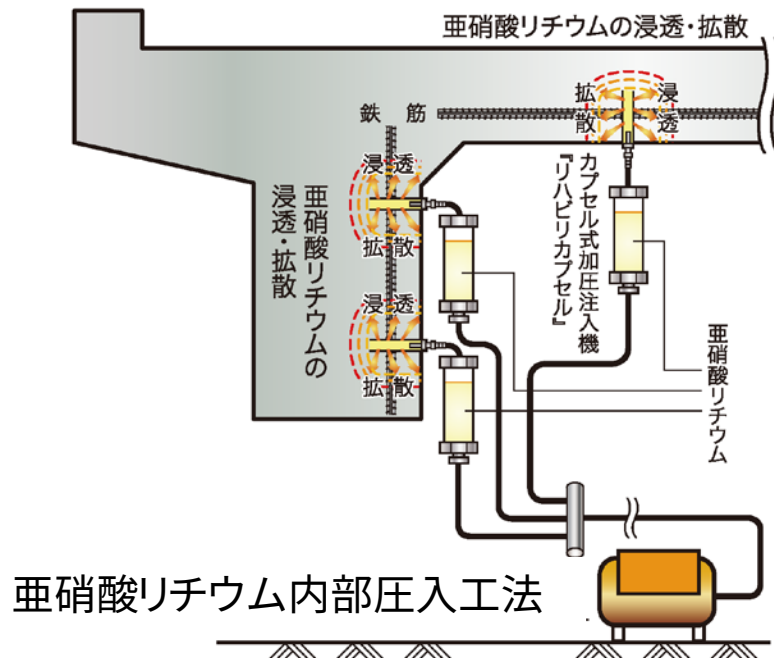
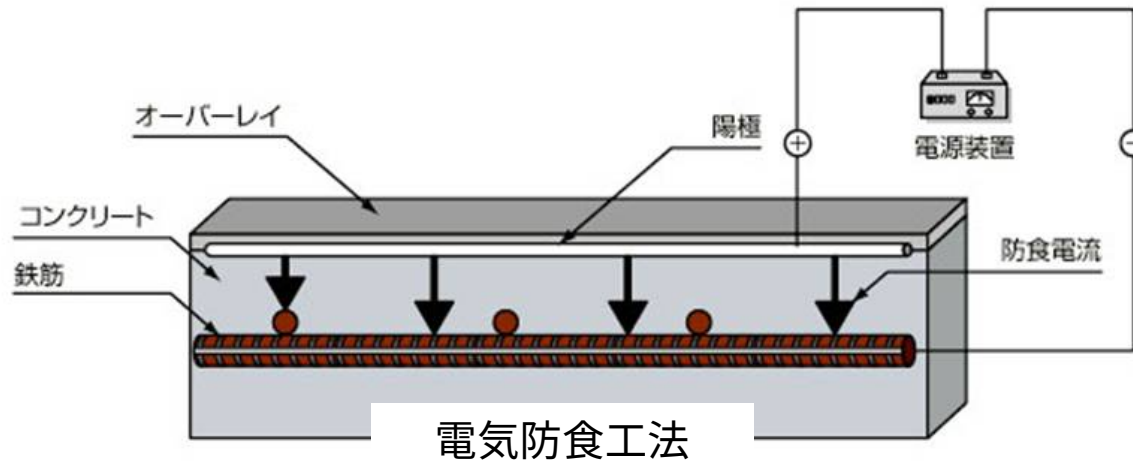
(1) 変状に応じた必要最小限の補修を定期的に行うシナリオ

- ・ひび割れ注入工、部分断面修復工に加え、表面保護工による必要最小限の補修
- ・ただし、これらの対策では鉄筋腐食の原因を完全に取り除いていないことを認識
- ・早いサイクルで再劣化を繰り返すと**LCCで劣る**と考えられる
 - ⇒ 残存供用年数が少ない場合などでは適用されることもある
 - 再劣化と再補修を繰り返すたびに、保有性能は低下し続けることも考慮

(2) 鉄筋腐食を根本的に抑制し、将来的な再劣化を許容しないシナリオ

- ・ひび割れ注入工、部分断面修復工に加え、以下のような対策を併用する
- ・**電気防食工法**（鉄筋腐食を根本的に抑制）
- ・**亜硝酸リチウム内部圧入工法**（鉄筋腐食を根本的に抑制）
- ・**全断面修復**（塩化物イオンを含むコンクリートを完全に除去）
 - ⇒ これらの工法を適用すれば、**再劣化のリスクを限りなく低減**できる
 - イニシャルコストでは高価となるが**LCCでは優れる**場合が多い

「将来的な再劣化を許容しないシナリオ」で適用される補修工法



全断面修復工法

劣化過程が

【劣化期】

の場合



[劣化指標]

- ・大規模なはく離、はく落
 - ・鉄筋腐食量、著しい断面減少、変位、たわみ
- ⇒ 耐久性能だけでなく耐荷性能も大きく低下

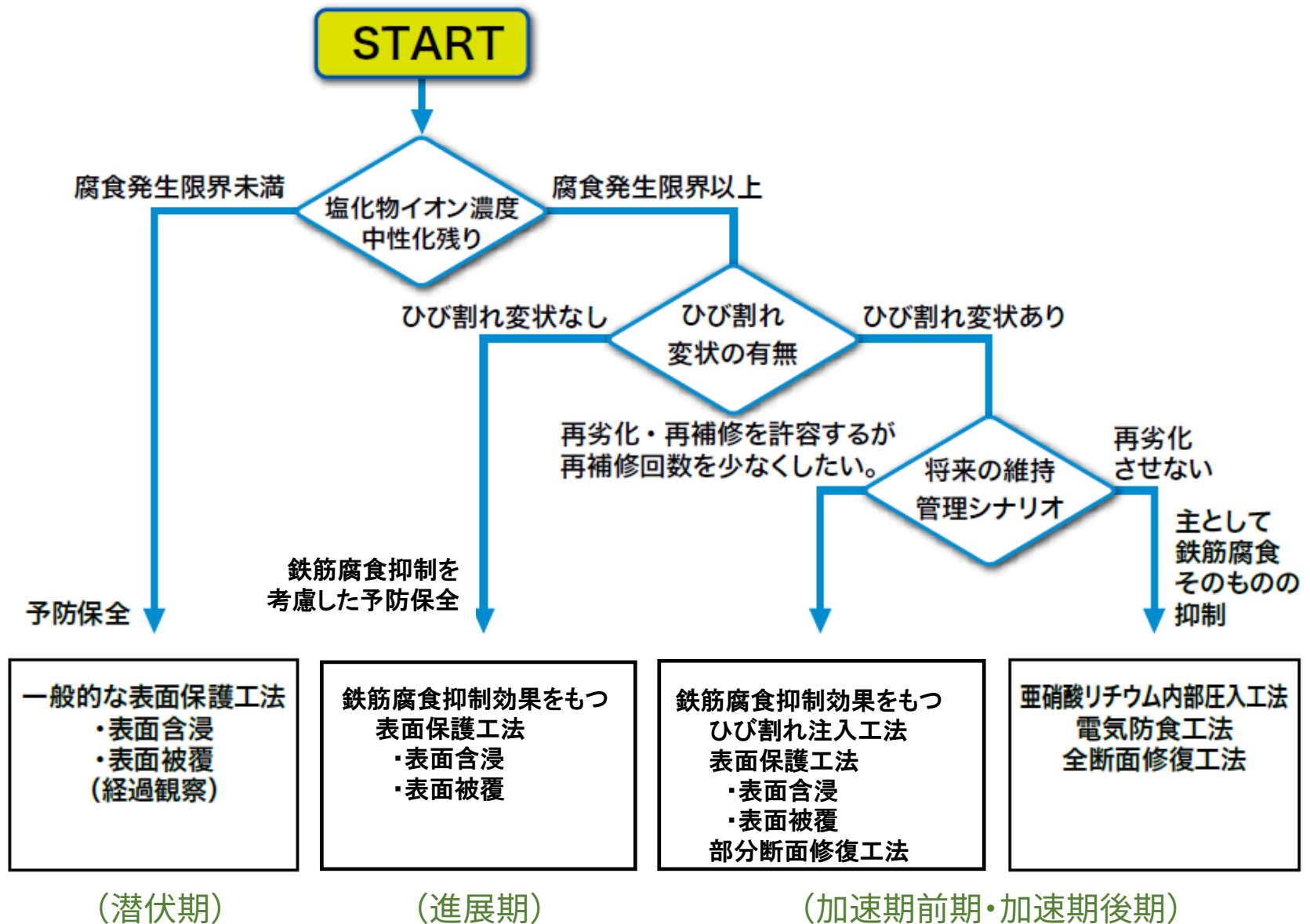
[補修工法の主たる要求性能]

- ・耐荷性、剛性の回復
- ⇒ 構造物の安全性確保が急務

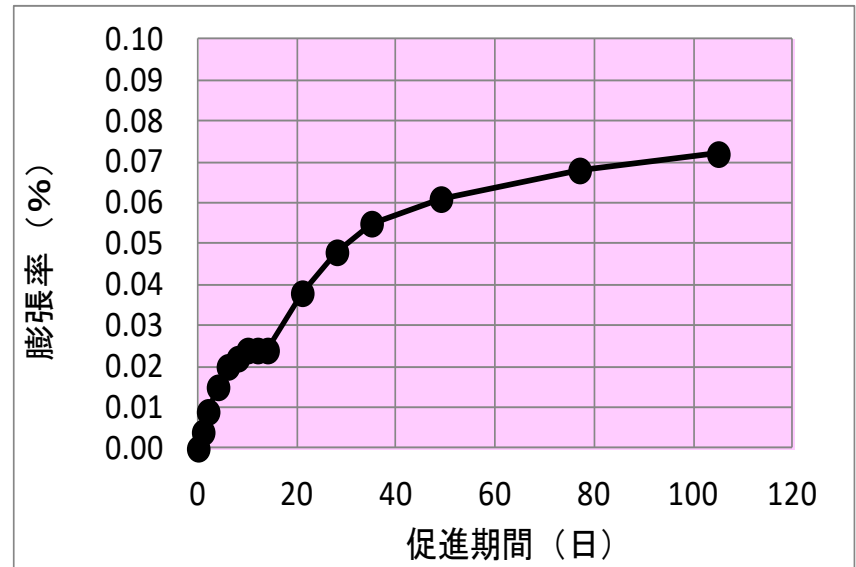
[維持管理シナリオに応じた補修工法の選定]

- ・工学的に必要とされる対策を早急に採る以外にシナリオはない
- ⇒ 補修だけでなく、補強、供用制限、架け替えなども検討

塩害・中性化の補修工法選定フロー



●ASRの補修工法選定



ASRの一般的な補修工法

【劣化因子の遮断】

目的：アルカリシリカゲルに水分を与えない

工法：表面含浸工法
表面被覆工法
(ひび割れ注入工法)

【アルカリシリカゲルの非膨張化】

目的：アルカリシリカゲルの膨張性そのものを消失、低減させる

工法：ASR抑制剤(亜硝酸リチウム)の活用

【コンクリート部材の膨張拘束】

目的：外部拘束によりASR膨張を物理的に拘束

工法：部材接着工法・巻立て工法



[条件]

- 平野部に位置する道路橋RC橋台
- 竣工後30年経過
- コンクリート表面に亀甲状のひび割れが多数発生している

[着目点]

- ASR膨張性を評価し、将来的に有害な膨張が進行するか否かを評価
⇒促進養生試験、過去の点検結果との比較など
- ひび割れからの錆汁の有無(鉄筋腐食の可能性)を評価

外観上のグレード	劣化過程	劣化の状態
グレードⅠ	潜伏期	ASRによる膨張およびそれに伴うひび割れがまだ発生せず、外観上の変状が見られない
グレードⅡ	進展期	水分とアルカリの供給下において膨張が継続的に進行し、軽微なひび割れが発生する。変色、アルカリシリカゲルの滲出が見られる場合もある。しかし、鋼材腐食によるさび汁は見られない。
グレードⅢ	加速期	ASRによるひび割れが進展し、ひび割れの幅および密度、範囲が増大する。また、鋼材腐食によるさび汁が見られる場合もある。
グレードⅣ	劣化末期	ひび割れの幅および密度がさらに増大し、段差、ずれや、かぶりの部分的な剥離、露筋が見られる。鋼材腐食が進行し、さび汁が見られる。外観上の劣化が顕著になる。変位・変形が見られる場合もある。

「劣化の状態」にASR膨張性の評価(大小)は含まれない

国土交通省 2018年制定 コンクリート標準示方書[維持管理編](土木学会)

[ASRの劣化指標]

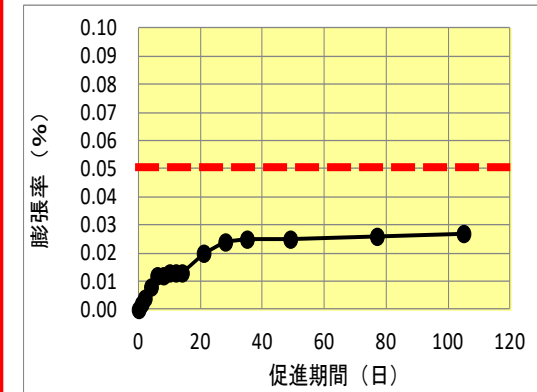
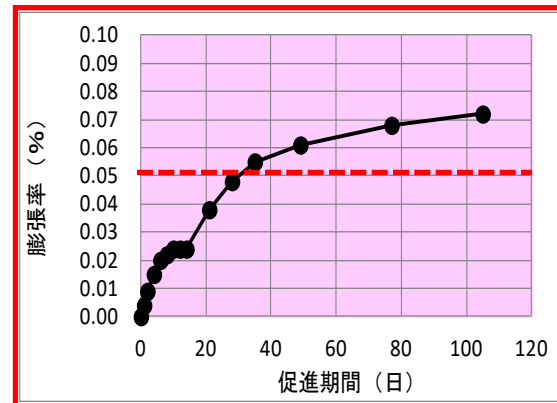
- ・ひび割れ状況

[劣化過程の留意点]

- ・あくまで調査時点での外観上のグレード
- ・将来の膨張性の有無は考慮されていない



コンクリート表面の変状



ASR膨張性は有害か無害か？

[劣化指標]

- ASR膨張量
- ひび割れ幅、ひび割れ密度
- 鉄筋腐食度

[ASR膨張性の評価]

- 目視等による定期的な外観調査
- コア採取による促進養生試験
- ASRを促進させる環境作用評価

[補修工法の主たる要求性能] ～ 残存膨張性が有害の場合 ～

- 水分をコンクリート内部へ侵入させない (劣化因子の遮断)
- アルカリシリカゲルの膨張性を消失、低減させる (ゲルの非膨張化)

⇒ 今後もASR膨張が進行することを前提とした対策が必要

ASR膨張性が【有害】の場合

[維持管理シナリオに応じた補修工法の選定]

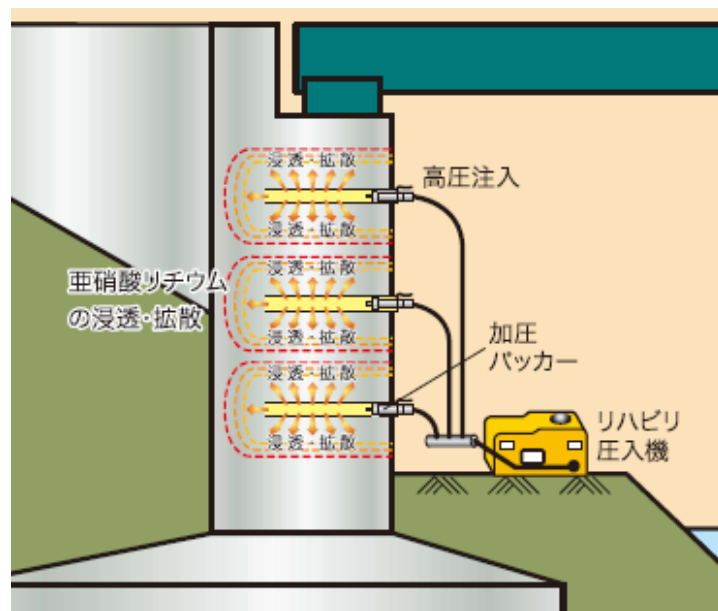
(1) 変状に応じた必要最小限の補修を定期的に行うシナリオ

- ひび割れ注入工、表面保護工による必要最小限の補修
- ASR膨張性が有害であるため、これらの対策では**早期に再劣化**する可能性を考慮
- 外観変状が甚大な段階では**LCCで劣る**こともある
 - ⇒ 残存供用年数が少ない場合などでは適用されることもある
 - 鉄筋腐食抑制効果を併せ持つ材料、工法を選択することも重要

(2) ASR膨張を根本的に抑制し、将来的な再劣化を許容しないシナリオ

- **亜硝酸リチウム内部圧入工**（ゲルの非膨張化による根本的なASR補修）
 - ⇒ この工法を適用すれば、**再劣化のリスクを限りなく低減**できる
 - ASR補修と同時に鉄筋腐食抑制効果も付与される
 - イニシャルコストでは高価となるが**LCCでは優れる**場合が多い

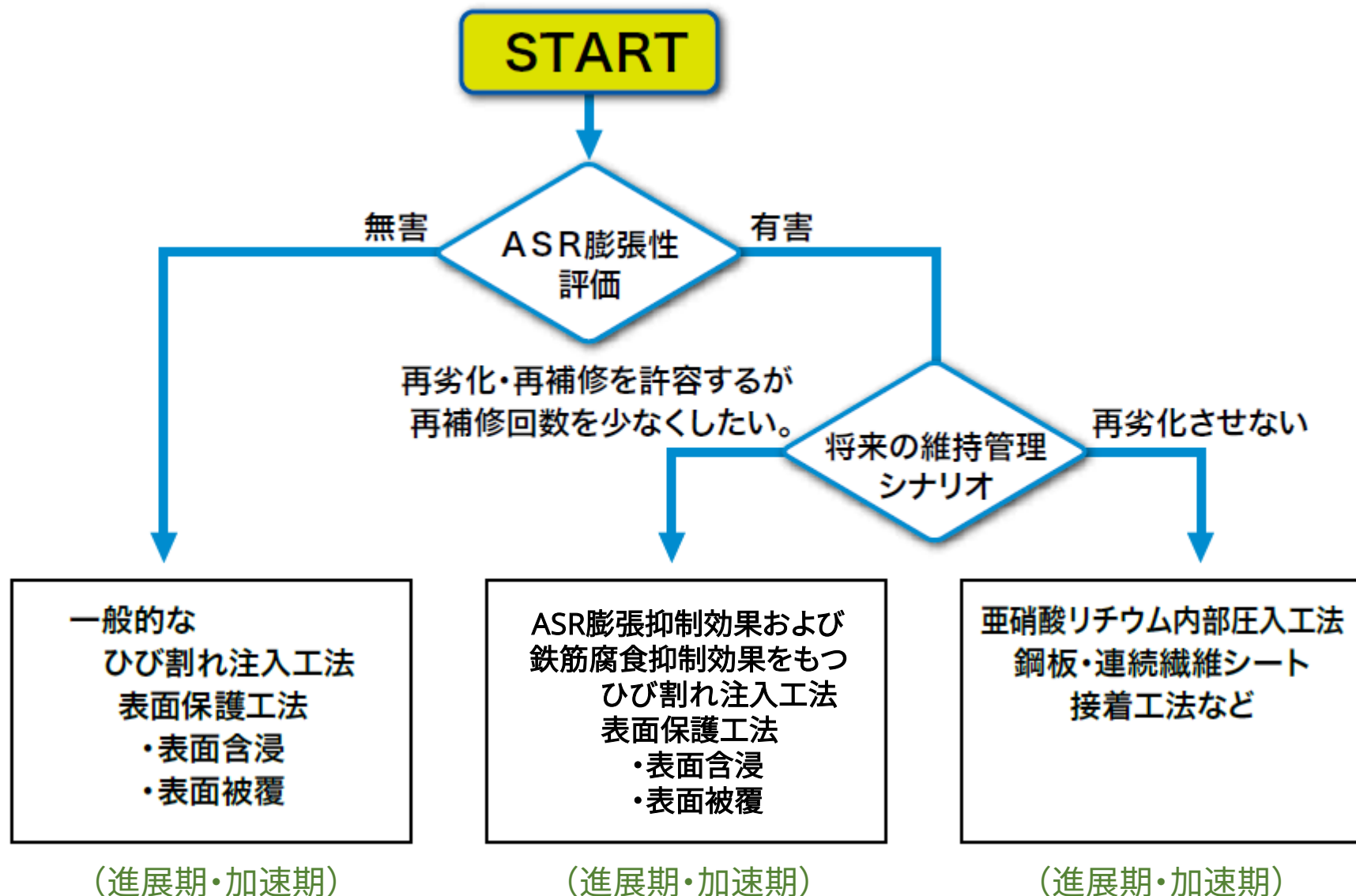
「将来的な再劣化を許容しないシナリオ」で適用される補修工法



亜硝酸リチウム内部圧入工法

- ① コンクリートにΦ20mmの削孔を行う
- ② 圧入装置, 配管, パッカーを設置して, 亜硝酸リチウムを部材全体に内部圧入する
- ③ 圧入完了後, 圧入孔を無収縮グラウト材にて埋め戻す

ASRの補修工法選定フロー



補修工法選定の考え方

工学的な
判断

- 劣化機構(メカニズム)と劣化過程(程度)に応じて補修工法を選定
 - ⇒ なぜ劣化が生じているのか？
 - ⇒ 次の劣化過程に進行させないために何が必要？

&

時間軸の
判断

- 補修した後の維持管理シナリオ(方針)を考慮して補修工法を選定
 - ⇒ 今後、どのように維持管理していくつもりなのか？



これらを総合的に判断して

『適切な維持管理にて構造物の健康寿命を延ばす』

ご清聴ありがとうございました



一般社団法人

コンクリートメンテナンス協会

<https://www.j-cma.jp/>

END